

# 第1回 各会の教育遭対担当者会議メモ

教育遭対部 辻本亨弥 中川和道

表記の会議が2019年6月6日に開催され、27の山岳会から52名が参加した(末尾参照)。52名には聴覚障がいの方々5名も含まれており、この点も大切にしていきたい。会議の司会進行は教育遭対部 辻本亨弥部長がつとめた。まず2月10日に宝剣岳で滑落死亡された北川宗子さん(ぼっぼ会)に黙とうを捧げた。次に中川和道部長から会議のねらいや意義について、「府連の教育遭対部と各会の教育担当者、遭対担当者との連携が有意義である。中川が知る限り今回が初めて。こういう会議を年1回をめぐりにやってみよう」と発言があった。

会議のメインテーマは「遭難時初動」であり、案内文では具体的な問題の事例として(1)下山連絡がない時、どの時点で遭難と判断するか、(2)外部への連絡はどうすればいい?警察?消防?府連救助隊?という2つの問題が提示されていた。当日は、問題を掘り起こす事から始め、遭難初動に関して各会が抱えておられる問題点や困ったことはありませんかと発言を求めたが、残念ながら問題の提起はなかった。そこで取り付きやすい事例(2)から始めることとなった。事例(1)は時間切れで取り上げることができなかった。事例(1)に関して発言準備をしてご出席いただいた複数の会があり、あとでお叱りを受ける結果となった。お叱りを含め、問題点は、[1]会議名称「教育遭対部員会議」は、「教育遭対担当者会議」が正確。[2]進行は、予告にあった事例に時間を設けてほしかった。その事例に関して自会の事故の発表をと、まとめて来たのに発言の機会なし。[3]懇親会よりも全員発言の機会が欲しかった。[4]近々にもう一度開催を望む、などであった。

これらの弱点はあったものの、27の山岳会から52名もが参加して下さり、討論が活発に行われたので、教育遭対部としては、一応、大きな成功と評価している。近々、もう一度開催を検討中であり、上記の問題を改善し、よりよい全員参加型(各会の問題点を提起して頂き全ての会から知恵を出し合い協力)の集まりとしていく。今回時間切れでできなかった事例(2)も取り上げる。期待していただきたい。

以下、当日の様子を紹介し、議論をまとめる。

1. 司会から「遭難初動の手引き書がある会は?」との問いかけがあり、山の会ボレポレ、モンテスが作成済みとのことであった。

2. 救助要請・搜索要請先について

司会から「救助要請・搜索要請先には、警察 110、消防 119、所轄警察、山小屋の4つが考えられる。みなさまの経験事例を発言して下さい」との問いかけがあり、以下の経験事例が発言された。順に列挙する。

・木村治朗さん(泉州)第8回事故対策会議で説明済み。2014年4月末 中ア熊沢岳で同

行者が木曾側の雪斜面に 650m 滑落重傷。7:50 事故発生。救助要請を試みたがアマチュア無線 145.00MHz は不通。9 時、iPhone が 110 番（県警本部通信指令）に通じた。全面的に説明後、所轄（木曾署）に回され全面的に 2 度目の説明（最初から所轄にかけていけば最初の 1 回分の時間が節約できた）。この間、2 回の説明に要した時間は計 12 分。9:36 木曾署より再入電「本部航空隊にヘリを手配した。本部航空隊は出発点検をまず行うので、あと 30 分程で離陸」との連絡。10:15 ヘリ飛来。準備後 10:48 吊上げ救助完了。警察に連絡 9:00 から救助まで 108 分。携帯の電池切れを警戒して無線機の使用をと警察に要望したが持っていないからと却下。携帯 GPS で位置はここですと話したがそれも却下。計画書はメールで県警提出済みであったが「所轄の手元にはないので」と全面的な説明を求められたため会の大阪留守本部に FAX 送信を依頼した。

- ・泉州労山から：35 年くらい前の事故。アマチュア無線で県警に連絡できた。ヘリ飛来  
ま

で文句なくスムーズに進んだ。

- ・ぼっぼ会：2019/2/10 宝剣岳稜線から木曾側 C 沢に 300m 滑落。同行者は停止位置確認不可能。のちに死亡確認。滑落直後に警察 110 番に連絡（13:30）。沢床のヘリ爆音から収容時刻は 15:00 と推定。搜索要請から収容まで 90 分。連絡を受けた警察は計画書を確認。菅の台バスセンターの計画書受け箱で提出を確認など、一連の手続きを実行した。

当日の発言者は、「木村さんの事例とは異なり、ぼっぼの場合はスムーズだったと感じた」と語ったが、上記の木村さんの例は 108 分、ぼっぼ会は 90 分であった。

- ・織田博志さん（くすのき）：私がガイド現役時代に、富山県警の山岳警備隊の方々と詰めた訓練を行った。ヘリで病院搬入後、エレベーター待機、手術室直行の迅速な体制を作りあげた。剣岳ハツ峰で脳に損傷を受けた登山者がこの素早い救助のおかげで社会復帰を果たした実績もある。富山の警察は、早いと思ってよい。

また、近郊の JR 道場付近の岩場だと、通報は 119 番がよい。よく訓練して下さっていて、早い。

- ・中川：2009 年正月に甲斐駒ヶ岳黒戸尾根を登行中、他パーティーの事故に遭遇。現場で救助責任者になって警察とやりとりをした。生存者によれば、「黒戸尾根を下山中、同行者が木道でアイゼンを引っかけたらしく谷底に 100m くらい転落。危険な谷を下りて確認したら頭が割れていた。私は怖くなり、登山道まで登り直して他パーティーを待機。電話もない。あなた方に救助を依頼したい」とのこと。携帯を貸して 110 番通報してもらい、中川が仲介して救助作業を進行。警察は山のことは知らない方。近づいたヘリとやりとりした警察が生存者に「遺体と生存者を一気にヘリ吊上げたいので生存者は谷底まで降りるように」。生存者は泣きそうになり、わなわたと震え、中川の

目を見つめて絶句した。それを見た中川は、警察に「現場を預かる者として、生存者の危険が大きすぎると判断。もうひとつ死体を増やすご指示ですか？ご指示の撤回をお願いします」と告げた。警察は指示を撤回。生存者は稜線からヘリ収容された。中川は思い知った、警察もさすがに万能とはいかないのかな？と。

- ・木村：2017年夏山連絡会 7/20 で、木村が「救助の要請について」という報告をした（下図）。これまでの議論のまとめがなされているので、参考にしてほしい。

**2017年夏山連絡会資料** 木村治朗 2017/7/20  
**救助の要請について**

**※通報先を意識しましょう**

**山岳警備隊について**

- ・山岳警備隊が充実しているのは富山、長野、岐阜
- ・上記県警でも各警察署に全部いる訳ではない

富山	上市署/富山南署/入膳署/黒部署/魚津署
長野	茅野署/駒ヶ根署/安曇野署/大町署
岐阜	高山署/飛騨署/下呂署/北方署/揖斐署/中津川署

**ヘリによる救助を要請する場合**



- ・警察組織の問題上、管轄警察で内容把握の上、本部の航空隊に出動要請がなされる
- ・山岳警備隊のいない警察署では場所の説明も困難を要する（現在は携帯で位置情報特定できる？）



- ・常に通報から現場までの時間短縮の訓練をしているだけに、出動までの時間が早い

- ※捜索を必要とせず、事故現場へ直接ヘリを呼ぶには消防の方が早い可能性がある
- ※通報時にはかならずGPS機能をONにしておくこと
- ※山岳警備隊が常駐している小屋を把握しておくこと(剣沢、穂高岳山荘等)

- ・中川、織田、木村によるまとめと上記の図の補足：原則として、警察は捜索を、消防は救助搬出を行う。事故者の位置が分からないときは、「**捜索要請なので警察**」へ。事故者の位置がはっきりしているときは「**救助要請なので消防 119 番**」へ。明らかに死亡と思われても消防への通報が「遺体搬出要請」ではなく「救助要請」である理由は、死亡の判定は登山者にはできず、医師が判定可能であるため。病院で死亡を確認、という報道などはこの事情を反映。

消防は搬出を任務とし時間短縮の訓練を積み重ねているため、搬出の対応が早い。

警察に“捜索の”要請をするときは、その山域を所轄する所轄警察署に連絡するのがよい。110番に連絡してしまうと、所轄ではなく県警本部通信指令に通じてしまう。県警本部通信指令は捜索の実際を司ることはできないので県警本部通信指令から所轄警察署に回され、そのため、説明は2回必要となる。その山域を所轄する所轄警察署にいきなり連絡できれば、説明が1回省略できるので有利である。

所轄署の中でも山岳救助隊・山岳警備隊をおいている所轄警察署は山岳事故への対応が早い。充実しているのは、木村の調べでは、富山(上市署、富山南署、入膳署、黒

部署、魚津署)、長野(茅野署、駒ケ根署、安曇野署、大町署)、岐阜(高山署、飛騨署、下呂署、北方署、揖斐署、中津川署)。

山岳救助隊・山岳警備隊をおいていない普通の警察署(あるいは110番)に連絡した場合には、電話を受けた担当者は山のことを知らない場合が多いので、「不審なできごと」として扱い、担当が一応の情報を得て整理した後に、所轄警察署に回し、そこから本部航空隊へと順番につないでいく。そのつど情報の確認(計画書の取り寄せなど)と整理を行う。そのステップごとに全面的な説明を最低2回は繰り返さねばならない。携帯電話の予備電源が必要かも。

- ・木村：携帯・スマホで消防や警察に連絡を取る場合、自分の携帯のGPS機能をONにしておくで位置情報が即座に伝わる。2014年木曾署ではGPSデータ報告は却下されたが、今ではかなりの警察・消防でシステムが改善されており、100番119番通報により場所特定は即座にできることが多い。

また、山岳救助隊・山岳警備隊がいる山小屋(剣沢、穂高岳山荘など)の番号を知っておき、そこにダイレクトに連絡をとる手もある。さらに、山岳救助隊、山岳警備隊の電話番号が直接分かるとよい。

- ・辻本：警察とのやりとりで計画書の確認を求められ、手間取る場合が報告された。解決策として、計画書を電子申請しておくでよい。長野・富山などはリアルタイムで共有してくれる。警察が計画書を取り寄せる時間が省け、迅速な救助につながる可能性がある。
- ・中川：電子申請コンパスシステムが普及してきた。別の機会(2019夏山連絡会)にて報告したい。

### 3. ココヘリの説明

司会から、労山大阪府連救助隊 隊長松本好平さんに、ココヘリの説明をお願いした。松

本隊長の発言要旨は以下のとおり。

- ・行方不明の人を探す際に、位置特定に有効。高山の事故も多いが、低山での道迷い・下山遅れも多い。北アルプスで道迷いは割と少ない。むしろ、近郊登山で道に迷って沢に入り滑落するケースが多い。
- 府連救助隊の搜索訓練でもヒトココを導入。有効性を確認してきた。
- ・入会金3,000円(労山会員は無料)、年会費3650円で運営している。
- ・ヒトココは万能ではない。倒れて体の下になったり水の中だと発信電波が弱くなる。一種の保険と考えるのがよい。

- ・司会 辻本から、「死体が見つかるというのはその人の生命保険の手続きなどにおいて非常に大切。死体捜索のためにもヒトココは有効」と発言があった。

#### 4. 府連救助隊への協力要請の流れ

司会から、労山大阪府連救助隊 隊長松本好平さんに、府連救助隊への捜索・救助要請の

流れ、訓練の様子についてご紹介をお願いした。松本隊長の発言要旨は以下のとおり。

府連救助隊への協力要請の流れは、会で対応を検討→会の代表が府連の代表電話 TEL 06-6467-8544 へ連絡→連盟三役の電話に転送→三役で会議→労山救助隊へ出動要請→労山事務所に集合し対策を立てる。警察と労山救助隊がこの段階では連絡をとりあうことはないので、初動は、警察と労山救助隊の両方に連絡することになる。

府連救助隊は、従来からなされてきた搬出訓練に加え、捜索訓練を秋に実施している。近郊登山での事故や下山遅れを想定した訓練。複数のパーティーに分かれ、通信機器を駆使し連携しながら、周辺をくまなく捜索する訓練である。

会場から、「救助隊はどんな場合でも出動できるのか」との質問があった。松本隊長は

「ケースバイケースになる。出動できない場合（場所が屋久島とか）はある。」と回答した。

また、会場から、「府連救助隊は互助組織。でも、自分はなかなか協力できない。そん

な自分でも、いざという時に助けてもらえるのか」との質問も出された。松本隊長の回答は、「できる限りの範囲でやらせてもらう。実際に出動する以外にも事務連絡に当たる人員なども必要。救助隊にご協力ご登録下さい」。

#### 5. 以上の討論について、事故を起こした場合の基本的な観点について、織田博志さん（くすのき）から発言があった。

(1)頻繁にヘリ要請すると登山者への心象が悪くなる。

(2)骨折くらいなら自力救助するべきであると思う。自分たちでまず動く。要救助者を担

げるチームがいたら自分たちで運ぶ。

(3)こういう行動、自分たちの自覚が安全につながる。

#### 6. 参加の会と参加数 カランクルン(6+2)、吹田(5)、たつの子(3+1)、きたろう(3)、ぽっぼ(3)、泉州(3)、雑木(2)、KONK(2)、溪游会(2)、OWCC(2)、H.C.Teruru(2)、1名参加

の会は くすのき、ポレポレ、テンション、福島、ピトン、ももんが、モンテス、この  
はな、高槻、二十渉、くまごろう、つりばし、西淀、KLCC、安治川、白峰 計 27  
の山岳会から計 52 名。